

浅間巡検

柴原 晶子

9月7日、私達1年生は、嬌恋村巡検に引き続き、井内先生のご指導のもと、浅間山麓巡検を行った。前日から心配していた通り、雨がひどく、私達は行動予定を大幅に変更しなければならなくなった。

マイクロバスで旅館を出発した私達は、浅間山麓に残る唯一の自然林、王領地の森へ向かった。古風な別荘が点々と林に見えかくれし、雨も手伝って静けさがしみ入るようだ。

次に私達はハイロン開拓村へと向かった。戦前満州のハイロンで開拓を行った引揚げ者が、戦後、未開拓の浅間山麓に入植した開拓村である。住む家からスタートし、開拓農業協同組合を組織し、夜を徹して畑をつくり、ランプ生活を営んだという。現在は組合員の7割が酪農に従事し、その他、野菜づくり、民宿経営などを行っているそうだ。私達にお話を下さった開拓村の方が、「自分は基礎づくりをしたつもりです」とおっしゃっていたことが、とても印象に残った。

マイクロバスで坂道を上がっていく窓の向こうに見えてきたのは、新宿の高層ビルを横倒しにしたような大きな建築中のマンションだった。これは東京の大資本の建設するリゾートマンションである。バスを降りると工事特有の金属音がこだましている。地元長野原町当局の方にこの開発事業に関する様々な問題点についてお話を伺った。

なぜ長野原町での開発か、それは草津・軽井沢間に位置するからだ。東京圏に巻き込まれているのだ。町は平成元年、中高層建築物指導要綱を施行しその中で建築物の高さを規制した。しかし従来の上地開発指導要綱には高さ規制はなく、開発業者との対立が起こるそうだ。また建築物建設には周辺住民の承諾が必要だというのが、保養を目的とする別荘の人々と商売繁盛を目的とする住民との間に意識のギャップが起こるという問題もあるという。さらにリゾートマンション完成後、飲料水や交通設備、ゴミ処理など、町当局の抱える悩

みは意外に大きかった。淡白な語り方の中にも深く考えさせられる訪問先だった。

次に私達が訪れたのは大日向地区の公民館である。戦後開拓地の1つであるこの地に至るまでの経緯やその後の開拓、そして文芸春秋で岩田薫氏が「大日向地区のゴルフ場開発問題」で紹介した、環境破壊問題に発展したゴルフ場開発計画について、地区役員の方々からお話を伺った。

昭和初期、国策による満州入植が産業組合の手で進められた。南の大日向村では厳しい自然や環境条件のもと、当時生活が困窮し、数10戸が満州に入植。終戦後ソ連・中国によって立ち退かされ、昭和22年に164名が浅間山麓に入植した。組合を組織し開拓に励み酪農や野菜栽培が盛んになった。しかし農業からの転業者が増え、昭和60年頃、ゴルフ場計画案が作られたが、住民の環境破壊反対運動で平成2年流れてしまった。

役員の方々のお話を聞いて印象に残ったことが2つある。1つは昭和22年に昭和天皇が大日向開拓団を巡幸された時の天皇陛下御奏上書についてである。そこには「日本再建に微力を尽くす覚悟」とある。開拓団員達は、自分達がなぜ苦しい思いをしてきたかを問うのではなく、その瞬間を懸命に生きることを運命と思っているのではないだろうか、と私は感じた。そしてもう1つは、環境問題という言葉では片付けられない生活の糧確保の難しさである。人間が生きていくことの難しさを、私はここで知ることができたと思う。

最後に中山道が北国街道と分岐する地点に栄えた追分の宿場町の跡を訪ねた。追分宿最古の大きな石の道しるべや樹形の茶屋、諏訪神社などをまわった。秋の始めて少し霧のかかった追分は、江戸時代を想起させるかのようにも思えた。

こうして私達はバスで軽井沢駅へと向かい、充実した浅間山麓一日巡検を終えたのである。

(9月7日井内教官指導)